

51 ガレノスとヴェサリウスの解剖学の

比較研究 (五)

— 骨を例にとつて —

坂 井 建 雄

順天堂大学医学部

骨学は解剖学における基礎であり、ガレノスもまず『解剖手技』第一巻で、解剖学を学ぶ際に骨格から始めること、さらに実物を見て学ぶことを推奨している。

ガレノスによる骨の解剖学は、『骨について初心者のために』で最も詳しく扱われている。ヴェサリウスの『解剖学図譜』(一五三八)は三枚の骨格人の図を含んでおり、また『ファブリカ』(一五四三)でも第一巻で骨格を扱い、そこに含まれる三枚の骨格人の図は、第二巻に含まれる一四枚の筋肉人の図と共に、きわめて芸術性の高い解剖図の逸品である。

ガレノスの『骨について初心者のために』のラテン語訳は、バラミオにより一五三五年に出版されたが、

翻訳に用いたギリシャ語原典はラスカリスが校訂したものであった。ヴェサリウスは『骨について初心者のために』のラテン語訳のあいまいな言葉を理解するためにギリシャ語原典を調べたいと考えたが、バラミオをロドルフォ枢機卿から貸し出しを断られたと『ファブリカ』第一巻で述べている。ガレノスの『骨について初心者のために』にはシンガー(一九五二)による英語訳があり、坂井・池田・澤井が日本語訳を行っている(『日本医史学雑誌』投稿中)。

『骨について初心者のために』の冒頭部分には、長大な総論が含まれており、ここで骨の部分および結合の名称についての用語が緻密な考証のうえに整理されており、現在用いられている骨についての解剖学用語の枠組みが築かれている。骨の連結に可動性のもの(関節)と不動性のもの(融合連結)があること、可動性の連結で頭と窪みを区別すること、不動性の連結に、縫合、釘植、板接を区別すること、長骨には骨髄が含まれ、また幼弱な長骨の骨端が分離することも指摘している。

骨の各論部分は、頭蓋から始まっている。ガレノスは分解骨の観察を行っていないが、縫合線の観察から個骨を識別している。そのため、蝶形骨を始め頭蓋の中心部分の骨では、十分な観察が行われていない。これに対して体幹および四肢の骨の形状はよく観察されている。しかし下顎骨が左右に分離していること、切歯骨が独立していること、胸骨が七個に分かれていることなど、人間の骨ではなく、サルの骨を観察したと考えられる記述が散見する。

ヴェサリウスによる骨の観察は、ガレノスの概念と用語を踏襲しながら、人骨についての観察に基づいた記述をしている。骨の結合の分類については、ガレノスの分類を一部修正して、『ファブリカ』第一巻の第四章で詳しく論じている。ガレノスは骨端の状態を、接骨端 *epiphysis* (長骨の骨端など)、合骨端 *symphysis* (下顎骨の正中部など)、突骨端 *apophysis* (下顎骨の筋突起など) の三種類に分けた。ヴェサリウスは、不動性の連結の種類の中に *symphysis* を含め、その例として恥骨結合を挙げた。現在の解剖学用語では、*sym-*

physis を線維軟骨結合と訳しているが、これはヴェサリウスの分類と実例を踏襲したものである。*apophysis* は骨突起と訳しているが、この名称をもつ突起の実例はない。*epiphysis* は骨端と訳され、骨幹 *diaphysis*、骨幹端 *metaphysis* とともに、長骨の部分を構成する。現在の解剖学用語で関係のない骨端 *epiphysis*、骨突起 *apophysis*、線維軟骨結合 *symphysis* の三つの語は、ガレノスによる骨端の三つの状態を示す語であり、ヴェサリウスを経て位置づけが変化したものである。

骨の各論については、ヴェサリウスはガレノスをほぼ踏襲している。頭蓋の形状に依存して縫合の配置が変わることを図示しているが、これは観察された事実ではなく、ガレノスの記述をそのまま図解したものである。頭蓋の個骨について、蝶形骨のみは図示しているが、それ以外の骨は描かれておらず、分解骨の観察がヴェサリウスにとっても困難であったことを窺わせる。